

ヨナ書 3章「神は悔い改めに応えてくださる」

3:1 再びヨナに次のような【主】のことばがあった。

3:2 「立って、あの大きな町ニネベに行き、わたしがあなたに告げることばを伝えよ。」

3:3 ヨナは、【主】のことばのとおり、立ってニネベに行った。ニネベは、行き巡るのに三日かかるほどの非常に大きな町であった。

3:4 ヨナはその町に入って、まず一日目の道のりを歩き回って叫び、「もう四十日すると、ニネベは滅ぼされる」と言った。

3:5 そこで、ニネベの人々は神を信じ、断食を呼びかけ、身分の高い者から低い者まで荒布を着た。

3:6 このことがニネベの王の耳に入ると、彼は王座から立って、王服を脱ぎ、荒布をまとい、灰の中すすわった。

3:7 王と大臣たちの命令によって、次のような布告がニネベに出された。「人も、獣も、牛も、羊もみな、何も味わってはならない。草をはんだり、水を飲んだりしてはならない。

3:8 人も、家畜も、荒布を身にまとい、ひたすら神にお願いし、おのおの悪の道と、暴虐な行いから立ち返れ。

3:9 もしかすると、神が思い直してあわれみ、その燃える怒りをおさめ、私たちは滅びないで済むかもしれない。」

3:10 神は、彼らが悪の道から立ち返るために努力していることをご覧になった。それで、神は彼らに下すと言っておられたわざわいを思い直し、そうされなかった。

悔い改めについて最近考えたのはいつですか。もう少し踏み込んで言うと、一番最近、実際に何かについて悔い改めたのはいつですか。その意味を理解していても、日常的に実践していない人が多いのではないのでしょうか。けれども、クリスチャン人生をスタートさせるのも、クリスチャン人生を継続するのも、悔い改めをとおしてだとしたらどうでしょう。1517年、マルティン・ルターは、キリスト教信仰に関する自身の理解を記した95ヶ条の論題を発表しました。その第一条に何と書いてあったかご存知ですか。そこには、「私たちの主であるイエス・キリストが、…信徒の全生涯が悔い改めであることを望まれた」とあります。また、ヨナ書3章をよく読むと、「立ち返る」という言葉が繰り返し使われています。これは、「悔い改め」を意味するヘブル語の単語で、同じヘブル語の単語が8-10節に4度登場します。ヨナ3章の主題は、悔い改めです。ある生き方を違う生き方に改めること、または、悪から神へと立ち返ることです。そしてここでは、王から道端の物乞いに至るまですべてのニネベ人が悔い改めました。けれども、彼らを変えろと思わせたのは何でしょう。今朝は、悔い改めがなぜ必要なのか、どうやって悔い改めればよいのか、そして、神が悔い改めにどう応えてくださるのかを、ヨナ3章が教えてくれます。

ヨナ3章の冒頭は、1章のやり直しのようです。1章は神が一度目にヨナに語られたときで、3章は、ヨナが嵐に遭って大魚の腹の中で過ごして陸に打ち上げられた後です。神のみことばが改めてヨナに与えられました。内容はほぼ同じです。「立って、あの大きな町ニネベに行き、わたしがあなたに告げることばを伝えよ。」そして今度は、ヨナは従います。彼は立って、ニネベに行きました。自分を振り返って猛省するのに時間がかかりましたが、ついにそこに着いたのです。けれどもまず、なぜヨナが人々に伝えなければならなかったのかについて考えます。

I. 悔い改めはなぜ必要なのか

- a. 悔い改めが必要なのは、不義や罪に対する神の激しい怒りが現実のものだからです。不義や罪はさばきに至ります。そのことは、9節にあるニネベの王の言葉からわかります。「もしかすると、神が思い直してあわれみ、その燃える怒りをおさめ、私たちは滅びないですむかもしれない。」4節でヨナが語るように命じられた内容からもわかります。
 - i. 「もう四十日すると、ニネベは滅ぼされる。」破壊されるのです。この書には、ニネベが大きな町であったと何度も繰り返されていますが、その当時最大の帝国に属する大都市が無となるのです。神の怒りの前では、どんな勢力も役に立ちません。
- b. ではなぜ、怒りのメッセージだったのでしょうか。
 - i. ヨナが神によって遣わされた理由を思い出してください。ニネベが看過できないほど邪悪だったからです。
 1. アッシリヤは非常に邪悪な国でした。貧しい者をしいたげ、不当な扱いをする帝国主義の国として知られていました。アッシリヤの王たちは、攻め取った町を焼き払い、死体があちこちに転がる様子を記録して、自らの勝利を喜びました。戦いを生き残った敵国者は、拷問を受けたり、強制労働させられたりしました。また、苦痛を最大限に味わわせるかたちで敵国の人間を殺す方法を編み出しました。それは、戦争中だけのことではありません。不当な扱いや暴力行為は、この町の日常だったようです。
 - ii. ここからはっきりとわかるのは、個人や町、そして国全体に起こる不義や悪について神が心を留められるということです。神の御前では、一人の人間が団体を隠れ蓑にすることはできません。また、団体の中で起こる悪も、団体に属する一部の人に全責任をなすりつけることはできません。私たちは皆、全体の中の一部だからです。
 - i. そして、悪に対する神の答えが、「燃える怒り」でした。その怒りは、悔い改めない人に災いをもたらします。彼らは、そのままの状態では滅びてしまうことを知りました。これは強い意味合いの言葉です。すべての不義に関する清算を求める神がおられるのです。これは恐ろしいことですが、同時に良い知らせだとしたらどうでしょう。
 - i. 悪を罰する神が多くの社会や宗教で一般的だったのは、そう遠くない昔です。この概念は広く受け入れられていました。人々がこの考えに疑問を持ち始めたのは豊かな近代社会になってからのことです。それは、私たちの多くが本物の悪というものに直面したことがなく、神の怒りが正当なものであり、望ましいものでさえあるということを見過ごしているからでしょう。愛の対義語が憎しみや怒りであるという考えには、決定的な欠陥があります。
 1. アウシュビッツの生還者エリ・ヴィーゼル氏は、私たちが遭う何倍もの悪を目の当たりにしました。そして、次のように記しました。「愛の反対は怒りではない。無関心だ。」神が悪に無関心で、ただ親切な無害の愛をくれるのなら、もっと崇めるにふさわしい神を探したほうがよいでしょう。けれども実際には、被造物に対する神の愛は、悪が被造物を破壊したときに怒りを必然的に引き

起こします。愛と怒りのどちらかだけを無くすことはできません。真の愛は常に、愛する者が脅かされたなら義なる怒りをもって反応します。神の怒りは神の愛の反対ではありません。むしろ、神の愛の一部です。あなたも、自分の愛する人や大切にしている物が危険にさらされたらどうでしょう。自分自身に直接関わりのある問題として受け止めます。悪や罪に対する神の怒りも同じです。

- d. ここで、大切なことをお伝えします。私たちが知っているべき違いについてです。罪に対する神の怒りは、神をまだ知らない人たちにとっては差し迫った危機です。一方、イエスとすでに出会った人は、神の怒りを恐れて悔い改めるのではありません。イエスがすでに神の怒りをすべて受けてくださったからです。私たちが悔い改めるのは、神の心を痛めたからです。いずれにせよ、神が不快だと思われることに対して、一人一人が応答しなくてはなりません。その各人の応答が悔い改めです。

罪と不義に対する神の怒りが現実のものなので、悔い改めが必要なことはわかりました。また、その真理を受け入れるなら、それは警告であると同時に良い知らせでもあることがわかりました。次に、どのように悔い改めるべきかが話の中で語られています。ヨナはニネベの町に入り、一日歩き回ってさばきについて叫びます。すると、ニネベの人々はすぐに反応します。この反応には驚きますが、ここから教えられます。悔い改めには、内側と外側という両側面があることがわかります。ではまず、内側について見ていきましょう。

II. 悔い改めという応答

a. 内面的要素:

- i. 5節には、ニネベの人々がヨナの話聞いて神を信じたとあります。ヘブル語では、「神に」となっています。つまり、ことばを語るためにヨナを遣わされた神に対する信頼を示します。悔い改めの第一段階は、私たちについて神が言われたことを信じることです。神の判断がどれだけ不快で恥ずかしくても、それを信じることです。神が神であるゆえに、知恵を持って完全に私たちの本性をご存知だと信じることです。
- ii. 謙虚さは、神の判断を受け入れたしるしです。ニネベ人はどうしたでしょう。荒布をまとって、灰の中に座り、断食しました。このような行為は、古代社会では、心の中の深い悲しみや悔い改めを表明するしるしでした。王は王服を脱いだとありますが、ヘブル語を直訳すると、「威厳」を取り去ったとなります。古代社会では衣服は身分の象徴でした。衣服が力や権力を示しました。ですから、王が王服を脱ぐということは、自らの誇りや守りを取り去ることを意味します。完全にへりくだったわけです。
- iii. 罪深い性質という概念を排除し、自尊心が大切にされる現代では、これは論争を呼ぶ内容だとわかっています。現代人は、さばきも罪も信じません。悪いことをした自然のなりゆきがあるとは信じていても、究極的な普遍の道德基準の存在は信じません。
 1. けれども、そうになると、神との平和や和解といった賜物が奪われます。心からの悔い改めがなければ、本当の平安はありません。私たちの罪に対する神の評決を受け入れることなく、赦しの喜びをいただく希望は持てません。医師からガンを告知されても、そ

れを無視して、ガンを受け入れる精神的なつらさや手術を受ける肉体的なつらさから逃げることもできます。けれども、その先にあるのは死です。医師を信じて行動すれば、治る可能性もあります。皆さんは「医師」の言うことを信じましたか。私たちの状態に対する神の診断を信じましたか。

- iv. けれども、これは神に受け入れてもらうための決まったステップのように考えないでください。悔い改めを手段にしてしまいがちです。悔い改めているのだから、かわいそうだから赦されるべきだと神に納得していただけるはずとってしまうのです。それは心からの悔い改めではありません。自己中心的な行為だからです。心からの悔い改めは、神を中心とします。そして、私たちが神に対して悪いことをしたという認識から生まれます。

b. 表面的要素:

- i. では、表面的にはどのような悔い改めのしるしが現れるでしょう。この個所では、ニネベ人が悪から立ち返って正しいことをしようとしているようです。
 - 1. 内面と表面のふたつは別々ではありません。つながっていて、切り離すことはできません。実際、旧約聖書でイスラエルの民に語った預言者の呼びかけのほとんどが霊的な内容でした。つまり、神との関係にかかわる内容です。それと同時に、周囲の社会に多大な影響を与える内容です。つまり、互いとの関係にかかわる内容です。けれども残念ながら、教会に属する人の中には、神に立ち返ることは完全に霊的で個人的な問題だと考える人がいます。伝道を優先して、社会奉仕をおろそかにします。一方、社会貢献を伝道より優先し、キリスト教を完全に人とのかかわりのものにしてしまう人もいます。
 - 2. けれども、本当は両方の要素があるのです。皆さんは、両方を受け入れていますか。どちらが受け入れやすいですか。どちらに日頃から力を入れていますか。伝道または社会貢献と聞くと、居心地の悪さを感じますか。もしそうなら、福音の理解が偏っているからかもしれません。
- c. ここで、それほど急にニネベの人々が方向転換したのは驚きです。これほど急激な変化について、矛盾のない社会学上の理由はなかなかみつきません。結局、悔い改めは神から与えられるものだと教えられます。テモテ第二 2 : 25 からわかるのは、悔い改めが必要だと認められるよう人を導いてくださるのは神だということです。ヨナの話でもそうでした。そして、悔い改められるようにしてくださるのも神です。

神の怒りが現実なので、悔い改めが必要であって、内面的には神の判断を受け入れて悔い改め、表面的には行いを変えることで悔い改めるのなら、それに対してどのような応答が期待できるでしょう。神は怒りをおさめられるでしょうか。ニネベ人が 9 節でそのように問いかけています。そして、今朝私たちも最後にそれについて考えます。

III. 悔い改めの結果

- a. 4 節のヨナの宣言に注目してください。ヨナは、ニネベ人を神があわれんでくださる可能性について言及していません。「もう四十日すると、ニネベは滅ぼされる。しかし、悔い改めるなら神のあわれみの希望がある」とは言いませんでした。むしろ、ヨナは神がニネベを滅ぼされるのを今か今かと待っているようです。彼らを救ってくださいと涙ながらに懇願する様子はありません。そこから、ヨナの大切にしているものが垣間見えます。
- b. けれども 10 節には、神が災いを思い直されたとあります。神が予想外のことをなされたのです。あわれみによって応えられたわけです。ニネベ人が自分たちの悪い行いから立ち返ると約束すると、神も約束した行いを思い直されました。
 - i. どうしてそんなことをなさるのでしょう。これまでたくさんの時間を割いて、神が悪を放っておかれないと話しました。それなのに、神はニネベ人を放免されました。ここで私たちが解っておくべきことがふたつあります。
 - 1. 災いを思い直されたのは一時的な出来事です。アッシリヤは再び悪の道を歩むようになり、ニネベの町は結局、バビロン軍によって滅ぼされました。けれどもそれは、アッシリヤが北王国であるイスラエルを滅ぼした後のことです。町の人々は心から悔い改めたかもしれませんが、またすぐもとに戻ってしまいました。もうひとつ覚えておくべきことは、ニネベの人々が神と契約の関係を結んだ証がないことです。神の契約の名であるヤウェという言葉がここでは使われていません。神はあわれみ深く、忍耐強いお方ですが、人に侮られるような愚かなお方ではありません。
 - 2. けれども、この状況は矛盾があるように見えます。神はご自身の正しさを宣言しておられるのに罪人を赦されるのか、ということです。このせいで、4 章でヨナは怒ってへそを曲げてしまいます。先週学んだように、これは聖書の最初から最後まで一貫した疑問です。神は、悪い者をさばくお方であると同時に、罪を赦すあわれみ深いお方として、ご自身を示されます。愛するだけのお方なら、この世に正義はありません。正しいだけのお方なら、私たちに希望はありません。正義とあわれみが矛盾しないかたちで、どのように共存できるのでしょう。
- c. ニネベ人にはわからなくても、私たちはわかります。その答えは、この出来事から何百年も後のエルサレム近郊の丘にあります。神の御子が十字架上で死に、私たちが受けるべき罰と滅びをその身に受けてくださいました。これによって、悔い改める人には神のあわれみの道が開かれたのです。今朝ここにおられるクリスチャンの皆さんは、十字架を見上げ、「私の罪が主を十字架につけ、御業は成就した」と言うことができます。十字架のもとで、神は私たちの罪に対して義をまっとうされ、神のあわれみが悔い改める者に惜しみなく注がれるのです。
- d. さらに、神は不完全な悔い改めにも応えてくださいました。これは、私たちに希望を与えてくれます。
 - i. ニネベの人々には、イスラエル人のヨナのように、儀式やいけにえの知識はありませんでした。それでも、心から悔い改めると、神は災いを思い直してくださいました。私たちも、赦しをいただくために、完璧な悔い改めは必要ありません。砕かれた、悔いた心を、神はさげすまれません。

- ii. というのも、私たちの悔い改めが完全完璧であるというのが条件なら、私たちは赦していただきようがありません。そうではなく、私たちは十字架で完全に示された神のあわれみにすごることができます。あわれみによって、私たちはさばきを恐れず、心底変えていただけることを願って、神のもとに出る勇気をいただきます。だから、勇気を出してください。神は、悔い改めに応えてくださいます。

3章では、1) 罪と不義に対して神が怒られるので悔い改めが必要であること、2) 私たちは、心で神のみことばを信じ、行いを変えることで悔い改めること、3) 神が悔い改める者をあわれんでくださることを学びました。最後に、ここまでで学んだことについて、いくつか実践できることについてお話ししましょう。

まとめ—具体的な適用

1. あなたは、神が罪に対して怒られると信じていますか。神の愛と神の怒りが両立することをなかなか納得できませんか。もしかすると、このことについて兄弟姉妹と話したり、祈る時間をとったりして、じっくり考える必要があるのかもしれない。
2. 悔い改めるのはむずかしいですか。悔い改めるときも、自己弁護をしてしまいますか。自分の中にある罪を言い訳したり、そんなに大した問題ではないと罪であることを否定したりしていませんか。ニネベの王のように、「王服」を脱ぎ捨てる必要があるのかもしれない。盾にしているものが何であれ、それを取り去り、謙虚になって自分の罪を認める必要がありませんか。
3. 神は赦してくださらないだろうという理由で、悔い改められないでいますか。恥ずかしいことをしてしまった、自分は罪人だ、という自覚はあるけれど、赦してもらえないでいますか。ヨナ書からわかるように、神は赦したいと思ってくださっています。そのことを信じて受け入れる必要があるのかもしれない。
4. 最後に、神の怒り、あわれみ、そして社会の再建という福音全体を、個人的にも教会全体としてもこの町に届けているのでしょうか。大阪は大きな町です。福音に示されるキリストの良い知らせを人々に届けるという召しに、あなたは従っていますか。そのようにして、正しいことを行っていますか。

私たちクリスチャンは、イエスとともに悔い改めの道をこれからも歩いていきましょう。父なる神が私たちの罪を示してくださるたびに、赦され、和解に導かれる喜びを体験させていきましょう。そして、神の恵みによって、大阪の町が大きく変えられるのを見ることができすように。ニネベのように地域全体が悔い改めるのを見ることができすように。